

## 巻 頭 言

## 光 珠 内 15 年 の あ ゆ み

久 保 田 泰 則

ことしは、当試験場設置の発端となった光珠内の事業所が設立されてから15年になる。

事業所の業務は、当時はじめた林力増強計画の一翼を担う事業として「精英樹選抜による林木育種事業」を中心とする造林樹種の品種改良と、新しい造林樹種の導入をはかることであった。

しかし、人間にだけ都合のよい期待と願望に対し、北国の自然は冷酷であり、人間の思うままにはならなかった。

カラマツの大面积造林に猛威をふるった先枯病を回避し、早成樹種として外国産マツ類を導入しようとする試みも、異郷土の樹種ゆえ、新しい環境への適応性は一世代にもおよぶ観察が必要である。雪害、幼令期を過ぎてからの急激な生長の減退、並びに同時に試みられた広葉樹のハンノキ類の導入など、異郷土樹種の導入の困難さを十分に経験させられた。また、精英樹選抜による育種事業も、遺伝的にすぐれた精英樹が見つけれ、その子供も生長がきわめて良好なことが判明してきたものの、その苗木を事業的に大量に生産できなくては、造林事業に結びつかないことになる。

発足当時に植えたポプラ林や並木は、亭亭とした巨大な樹木となり、北海道のきびしい寒さの中で適応して伸びる系統を実地に教えてくれたし、道産のドロ、ヤマナラシもたくましさを教えてくれた。一方トドマツは北海道全域に生育しながら、幼令期の生長がおそいこと、裸地の中での寒さの被害に余りに弱いことをなげかれたが、結局は、次代検定林の中で樹令10年にして漸く土着の強さを発揮し、旺盛な生長をみせ、もっとも安定した造林樹種であることを示している。しかも精英樹選抜が目標とした母樹のちがいによる子供の生長や、寒さの害のうけ方に大きなちがいのあることを実際に教えてくれた。またトドマツのような土着の樹種は、北海道の森林の歴史の中で、その生育する地域の環境に適応するように遺伝性をそれぞれ変え、人間がそれを十分わきまえて利用したとき、今までなかったような効果を発揮することを目の前で見せてくれた。

開場以来15年、失敗もたくさんあったし、成果は遅々としているが、試験場も漸く北海道の自然の中にとけこんできた。これからの進歩は今までより速くなるだろうことを期待している。

さらに、都市化の波の中でも、道産のツツジ、シヤクナゲなどの花木も、都会生活者を楽しませてくれるであろうし、いくつかの道産の広葉樹は都市の緑化に十分役立ってくれるであろう。  
(造林部長)